

令和2年度 氷見市教育総合センターだより 第6報

第2回 教育総合センター運営委員会 1月21日（木）

今年度も皆様方のご理解とご協力のもと、教育総合センターの事業を実施してまいりました。ご支援いただき、ありがとうございました。第2回センター運営委員会でいただきましたご意見の一部を紹介いたします。



○研修について

- ・教育セミナーが2回から1回になったが、菊池省三先生の講演はぜひ聞いてみたいので、来年度は楽しみである。
- ・若手教員研修会に参加した自校の教員から、勉強になったと聞いた。経験年数で分けると、より勉強になると思う。
- ・若手教員研修会は対象をもっと限定（例：2年目の教員対象）し、絶対に身に付けてほしいという内容でしっかりと実施するとよいと思う。
- ・小規模校では学年が単級である。新規採用の教員が担任の場合、いろいろと分からないことがあってもなかなか研修の場が取れない。教科別やポイントを絞った研修の機会があるとありがたい。



○ICT教育の推進に向けて

- ・ICT教育の推進は、今後とにかく必要である。これまであまり触れてこなかった教員もいると思うが、一人一人の教員への支援をぜひお願いしたい。
- ・「一人一台端末運用研修会」のようにセンターから各校に出向く形式の研修は、特に全員に周知したい内容の場合はありがたい。今後も、現場に寄り添った研修をお願いしたい。
- ・一人一台端末は、子供も教員も楽しんで使っている。センターにあるプログラミングキットについての研修があるとよい。

○ENGLISH セミナーについて

- ・今年度の ENGLISH セミナーは、参加した自校の子供が生き生きして、喜んで帰ってきた。小中連携の取組でもあり、ふるさと教材もあるので、氷見の特色として生かしていけばよいと思う。
- ・ENGLISH セミナーは、英語部生徒だけでなく、英語で発表したい生徒にとって貴重な機会だったと感じている。

○その他

- ・県の研修との重複をなくすという視点を大切に、氷見ならではの研修を実施してほしい。
- ・コロナ禍の影響が続く可能性を考えると、オンラインで研修を実施するのもよい。

第2回 氷見市いじめ問題対策連絡協議会

2月17日（水）

会議では、まず「令和元年度問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」、1月に改訂された「改訂版いじめ対応ハンドブック」（富山県教育委員会発行）について説明を行いました。

その後の協議では、学校の先生方から、子供たちはコロナ禍でも様々な工夫をしながら落ち着いて毎日を過ごしているということやSNSの利用に関しては依然懸念があるという話がありました。また、いじめ問題には学校・家庭・地域が連携して取り組むべきであり、各方面から保護者へ支援することや大人が手本を見せることが、子供を取り巻く環境を整えるという意味で、いじめの未然防止につながるのではないかという意見がありました。他にも、動画を活用した啓発活動を取り入れるとよいという提案もありました。

最後に、西部教育事務所指導主事 吉尾徹先生の助言より、いじめの未然防止には、周囲の大人の理解が大きく影響すること、いじめはだめだという指導よりも自己有用感や自己肯定感を高める指導が求められており、分かりやすい、楽しい授業をすることも、方策の一つとなることを確認しました。



ICT教育推進プロジェクト会議兼ICT教育推進委員会 2月24日(水)

指導助言：富山大学大学院教職実践開発研究科 准教授 長谷川 春生 先生

今年度のICT教育推進に関する取組について共通理解を図り、幅広く意見交換を行うため、関係者が一堂に会して、ICT教育推進プロジェクト会議兼ICT教育推進委員会を開催しました。



会議では、ICT教育推進委員の蔵田教諭(十二町小)から先生方が気軽に参加できるミニ研修会の実施、澤武教諭(灘浦小)からプログラミング授業支援動画の作成、松本教諭(西條中)から教員アンケートによるニーズに応じた研修の実施等、各校での取組についての発表がありました。センターからは、ICTを活用した授業づくり研修会等の取組、市の担当者からは次年度のICT環境整備の見通し等の話がありました。

長谷川先生からは、各校の取組について助言をいただくとともに、今後のICT活用の進め方として、特に以下の点について教えていただきました。

○文科省は、調べ物やプレゼンテーションソフトでの学習のまとめをICTを使って行うことをイメージしている。

⇒あまり難しいことをやろうと思わない方がよい。とにかくやってみることが大切。

○中教審答申(R3.1.26)より

・「ICTの活用」が様々な面で取り上げられている。

⇒これまでの実践の延長線上と考えるとよい。

・端末の持ち帰りについても、心配はあるかもしれないが進めていく方向である。

・学習履歴(スタディ・ログ)の活用、学力調査のCBT化(解答にコンピュータを利用)等にも触れられている。



また、参加者からは、昨年度各校に配付された「プログラミング教育モデルカリキュラム」に基づいた実践に関する意見や、校内の様々な面でデジタル化が進んだ場合に、学校で学ぶことの意義をどう考えればよいのかという意見等が出ました。

今年度の成果や課題を生かし、今後もICTの効果的な活用に向けた取組を進めたいと考えています。

第2回若手教員研修会

12月25日(金)

教科別研修 (国語・算数・数学・社会・理科)

テーマ別研修 (Q-Uの活かし方・児童生徒理解、保護者対応)



第1回の富山国際大学教授 瀬戸健先生の講演会に引き続き、第2回若手教員研修会は、若手の教員が選択して、研修を受ける形式をとりました。本年度は、コロナ禍の影響及び夏季休業期間の短縮もあって、2回の開催にとどまったため、少しでも多くの内容の研修ができるよう、教育総合センターの指導主事等で対応しました。



前半の教科別研修では、教科の窓から、授業実践で困っていること、問題点等をそれぞれ発表していただき、解決法等についてディスカッションしながら進めました。受講者からは「教材研究の大切さを実感した」「課題が児童生徒のものになっているかの吟味が必要だと思った」「単元を通した育てたい力を考えて授業をすることの大切さがわかった」などの感想がありました。研修で感じたこと、学んだことがこれからの授業づくりに生かされ、楽しい授業、分かる授業が展開されることを期待しています。

後半のテーマ別研修では、研修したい内容について事前にアンケートを取り、多かったテーマについて研修を行いました。Q-Uの活かし方・児童生徒理解では、「Q-Uの分析をしっかりして、子供に寄り添う教員になりたい」「子供たちは一人一人成長したいと思っている」という言葉から、今後の学級経営に生かそうとする教員が多く見られました。一方、保護者対応では、子供の良いところや頑張っているところを保護者に伝えることを大切にすると、保護者と良好な関係を築くことができることを学びました。また、一人で抱えず、複数で対応することが大事だと気が付いた参加者が多くいました。若手教員の熱意に感動した研修会となりました。

学力向上市町村教育委員会プラン研究委託事業 拠点校の取組

今年度の研究拠点校のうち、朝日丘小学校と十二町小学校の取組については、先に紹介しました。今号では、南部中学校の取組等について紹介します。

南部中学校 主体的に学習を進め、互いの考えを練り上げる生徒の育成

—対話と振り返りを軸として—

昨年度の取組の成果と課題から、対話と振り返りを通して考えを練り上げることができる生徒の育成に向けて、更に研修を推進する必要があることが分かった。

学力向上策1 対話を核とした思考・判断・表現する過程の充実

学級活動における話し合いでは、最終段階で安易な決定を招くことが多いことから、合意形成に向けての話し合いの仕方を段階的に指導する必要がある。そこで、第1学年国語科では、自分事として捉えながら対話ができるよう、導入で台本による話し合い劇を取り入れた。劇であるため、話し合いの姿を客観的に捉えることができ、生徒は実感を伴いながら話し合う際の視点「話し合い到達アイテム」を見付けていた。実際の話し合い場面では、生徒はアイテムを活用し、友達の意見と比べながら聞いたり、他の意見を取り入れて反論したりしながら対話し、みんなが納得できる意見をつくり出すことができた。



〈アイテムを利用した話し合い〉

学力向上策2 自らの学びを自覚し、次に生かすための学習過程の工夫

第2学年理科では、終末に行う振り返りの項目を「授業での学び」「友達からの学び」「更に学びたいこと」「他の学習での活用」と設定し、その中から1つ以上選んで記述させるようにした。振り返りの視点を明確にすることで、授業や友達の意見から新たな気づきが生まれたといった自らの変容や、次時以降につながる気づきについて記述する生徒が多く見られるようになった。

データに見る生徒の変容

生徒アンケートで「友達の思いや考えを踏まえて話し合うことができた」と答えた生徒が全校 89.5%、特に第2学年では前年度比 6.9 ポイントの上昇であった。しかし、「学んだことを他の学習に生かしている」が前年度比 2 ポイント上昇にとどまった。

今後は、既習事項を生かした授業展開の工夫等についても研修を深めていきたい。

第2回 幼保小接続研修会

1月19日(火)

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図るため、子育て支援課との共催で、本年度2回目の幼保小接続研修会を開催しました。

今回は、小学校区毎に取り組んだ交流の内容について振り返り、次年度の計画に反映することを目的に実施しました。本年度はコロナ禍の中、交流が制約され、予定していた内容を実施できないことも多くあったようです。しかし、与えられた環境の中で最大限の交流や活動を行おうと努力をされていました。

講師の瀬戸健先生からは、「氷見市の取組が先進的で、着実に成果を上げている。これまでの取組に自信をもち、入学に向けての不安感を少しでも取り除く取組を継続するとともに、氷見市がリーダーになってほしい」と励ましの言葉をいただきました。

＜参加された先生方の声＞

- 園が作成した「わくわくきときとカリキュラム」を見て、年長児がどんな遊びをし、どんな力を付けているのかが分かり、小学校としてどんな準備をすればよいかを考えるよい機会となった。
- コロナ禍の中だからこそ必要な連携について小学校の先生方と直接話す機会が持て、今後の指導の方向性を見出す機会となった。
- 新たな取組を増やすのではなく、これまで実施してきた取組を見直し、改善し充実させていくことのほうが大切だと感じた。

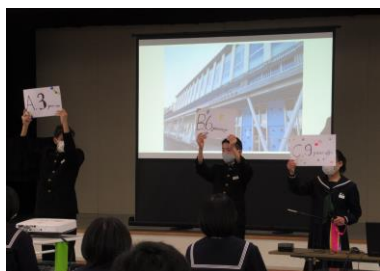
新年度に向けて、幼保小の連携が益々深まっていくと思いますが、各園から提出される要録や氷見市就学接続シートの情報を校内で共有され、新入生がいきいきと活動できるよう配慮をお願いいたします。





12月25日に「ENGLISH セミナー2020」を開催しました。各中学校2年生・義務教育学校8年生が、各学校と校区の特色を英語で紹介しました。また、クイズタイムでは、小学生を含む参加者全員でALTが出題するクイズを楽しみました。

◆第1部：中学生によるプレゼンテーション



校舎が建てられて何年経ったでしょうか？A3年、B6年、C9年。



これは、Bかな？



In summer we have the Gion Festival.

◆第2部：ALTによるクイズタイム



The answer is A. This is a flag of the USA.



その国旗は中国の国旗です。（小学生が解説！）



Aでいいかな？・・・中学生も小学生も悩んでいます。

●参加者の声

◆中学生によるプレゼンテーション

- ・発表内容にクイズを取り入れて、参加者に楽しんでもらえるようにした。（中学生）
- ・発表の流れに映像がぴったり合うように、スライドの切り替えのタイミングに気を付けた。（中学生）
- ・ジェスチャーを取り入れ、間の取り方を工夫して、テンションを高めにして話した。（中学生）
- ・プレゼンテーションでは、聞いている人に分かりやすく、はっきりと、スピードを意識して話すようにした。（中学生）
- ・他の学校の特別な時間帯、自分の学校にないものを知ることができ、面白かった。（中学生）
- ・小学校の総合や外国語の授業で学んだ内容だったので、だいたい理解できた。（小学生 82%）
- ・自分も中学生になったらあんなふうに発表したいと思った。（小学生 76%）

◆クイズタイム

- ・初めて聞く内容もあり、新しい知識を得た。（中学生 100%）
- ・自然な英語を聞く機会がありよかった。ALTが話す英語も分かりやすかった。（中学生 100%）
- ・楽しかった。（小学生 100%）
- ・ALTが話す英語はだいたい分かった。（小学生 88%）